

No.7
vol.2 no.3
1997.12.10 発行

JMMA
JAPAN
MUSEUM
MANAGEMENT
ACADEMY

日本ミュージアム・マネージメント学会

会報

ミュージアムの時代に…

日本ミュージアム・マネージメント学会理事

筑波技術短期大学副学長 沖吉和祐

日本が西欧の近代文明を追い始めて百数十年。いま漸く繁栄と安定を見出しているように見えるが、この歴史は光と共に陰を持つ年月であった。自然の縮小、社会モラルの低下や人心の荒廃が進むこの頃。狭い国土、少ない資源という限られた条件のもと、教育を受けた勤勉な国民を擁する日本は、近代世界の先端に位置する国に駆け上がった。近代という西欧文明の後発であった日本が、いま、その閉塞を先頭で味わうことになっている。

経済の急成長、類を見ない科学技術の発展を支えたのが、産業を始めとする社会全体の「縦割り」であった。この「縦割り」を脱し、限られた地球の資源と空間を活かしていく手掛かりは、社会のシステムの複合化、融合化にある。その上で、「先導的・先端的」な科学研究は大きな助けになるであろうが、その前に、我々人類を生み育てた自然と、地域社会が育んだ文化・文明を謙虚に学び返すことが大切だと思う。

様々な分野で、専門化・細分化・高度化が進んでいるが、次の時代を創造するためにはこれらの系統的なネットワーク化が課題となるだろう。ここが、近代化の手法との基本的な違いである。ネットワークの中で孤立しないよう、周りの動きが良く分かるよう、私たちは、自分が今持っている「専門」とは別の「何か」を加えた「複数の手」を持つように心掛けたいものである。

私は、これを手助けできるのが「博物館」だと考えている。そのために、博物館をどうマネジメントしていくか。博物館はどのような文化を創造し、発信できるか。人々は、博物館でどのような「専門」が学べるか。ポスト近代となる21世紀。博物館を取り巻く地域社会にどのように関わっていくか。地域の文化づくりに博物館が果たせる役割は何か。この学会の活動には、限り無い可能性がある。

自然、文化、人との触れ合いのある生活、ものと空間と情報のバランスある社会—新しい21世紀ネットワーク社会が「ミュージアム・ステイツ」となるよう願っている。



C·O·N·T·E·N·T·S

■ミュージアムの時代に…/日本ミュージアム・マネージメント学会理事 筑波技術短期大学副学長・沖吉和祐	1
■第3回大会開催概要	2
■文部省委嘱事業の経過報告/会長・大堀哲	3
■ミュージアム文化研究部会/部会長・沖吉和祐	4
■制度問題研究部会/井上敏	6
■理論構築研究部会/部会長・高安礼士	7
■事業戦略研究部会/幹事・斎藤恵理	8
■ソフトサービス研究部会/幹事・重盛恭一	9
■教育・コミュニケーション研究部会/幹事・弓場哲雄	10
■ミュージアムショップ研究部会/山田礼子	11
■投稿ご自由 侃々諤々/書評/会員からのメッセージ	12
■研究部会の開催予定一覧 ■INFORMATION	16

日本ミュージアム・マネジメント学会 第3回大会開催概要

1. テーマ：時代の転換とミュージアム
2. 趣 旨：時代が大きく転換しようとしている今日、「ミュージアムには何が求められ」、新たな時代に向けて、「ミュージアムは何をしなければならぬか」を学際的に考察し、これからの「ミュージアム・マネジメントの基本的方向」を模索する。
3. 主 催：日本ミュージアム・マネジメント学会
4. 協 力：学校法人学習院
5. 会 場：学習院大学
6. 期 日：平成10年3月7日（土）～8日（日） 2日間

●文部省委嘱事業の経過報告

J M M A 初の海外調査研究 実施へ

会 長 大 堀 哲

文部省委嘱事業については本会報で既にお知らせしたところではありますが、J M M A としては文部省委嘱はもとより調査事業そのものが初めての試みとなるため、予算の範囲内でいかに効果的に実施するか、調査地、調査内容等について慎重に検討して参りました。このほどその具体的な実施要項が下記の通り決まりましたので、その概要をお知らせいたします。なお、年末の多忙な時期にもかかわらず4名の方々にお引き受けいただき感謝しております。調査終了後も報告書作成などでご苦勞をおかけしますが、会員の皆様とともにその成果を期待したいと思います。

記

1. テーマ：「成熟社会の博物館利用者サービスの新しい在り方に関する研究開発」

利用者の視点に立って教育活動を企画、運営している英国の博物館及びその関連施設の事例の収集、実態調査・研究を行うことによって、我が国の博物館の教育普及活動や利用者サービスの新しいモデルを提案する。

2. 調査日程：平成9年12月6日(土)～16日(火) 11日間

3. 調査地：①ロンドン

(大英自然史博物館、科学博物館、映像博物館、シャロックホームズ博物館、看護・育児博物館等)

②バーミンガム (バーミンガム科学産業博物館)

③ヨーク (ヨークバイキングセンター、ヨーク博物館)

④エジンバラ (ヘリテイジ・センター、カメラ・オブキュラ、ハントリーハウス、子ども博物館)

⑤チェルトナム (農業博物館)

⑥ブリストル (ブリストル大学) 他

4. 調査団：団 長 J M M A 副会長 斎藤温次郎 (斎藤報恩会自然史博物館)

副団長 J M M A 理事 高橋信裕 (文化環境研究所)

調査員 J M M A 幹事 塚原正彦 (国立科学博物館)

調査員 J M M A 会員 松永 久 (三菱総合研究所)

ミュージアム文化研究部会

ミュージアム文化研究部会では、秋色深まる小樽、札幌において、地域文化に対する博物館の役割について研究協議を行った。

10月18日(土)

小樽交通記念館「動く展示の可能性」

小樽市内ミュージアム「景観とミュージアム」

札幌ファクトリー「地域と博物館」自由討議

10月19日(日)

北海道大学

「ユニバーシティ・ミュージアムの未来像」

北海道開拓記念館「地域文化とミュージアム」

北海道開拓の村「地域文化とミュージアム」

1. 小樽交通記念館

(1)概要

昭和38年、当時の国鉄が、北海道の鉄道の発祥地である小樽市手稲に北海道鉄道記念館を設置した。これをさらに拡充し、平成8年4月に開設されたのが当館である。当初、北海道立の博物館が計画されたが、その後、小樽市が設置することとなった。

小樽～札幌間を走っていた「しずか」号、それと同じアメリカ・ポーター社で1909年に製造された蒸気機関車アイアンホースが敷地内を走っている。この他、約50台の鉄道車両が野外を中心に展示されている。船舶、自動車などを含め、北海道の交通の歩みを語る総合交通博物館である。

(2)管理・運営上の特色

敷地（5.8ヘクタール）、施設は小樽市の所有で、運営は市が51%出資した第3セクター（株式会社）が独立採算で行っている。市は「指導」という形で運営に参加。前進の鉄道記念館のコレクションと、開館に当たり小樽市が収集したコレクションで構成されている。

館のアイデンティティを明確にするため、「アイアンホースを小樽の港に揚げる」ことにこだわり、実現した。屋外展示が中心で、管理面の困難は多いが、乗り、触れ、動かしたりして、北海道（地元）の文化や生活に親しみつつ、楽しく学べる博物館を目指している。年間入館者は約22万人。

(3)視察の印象

- ・職員に服装やパフォーマンス、景観など当時を彷彿とさせる工夫があると、大型の実物展示の特色がもっと活かせるのではないかと感じた。例えば、筐に包んだおにぎりやアイスクリームをホームで売り、車内やベンチで食べると楽しそうだ。
- ・鉄道関係の素晴らしい道具のコレクションが十分活かされていないものがある。道具を「主人公」にした体験学習の機会の拡大やマルチメディア化が考えられる。
- ・需要ニーズの把握とその反映面で、市と会社間の意思疎通が重要だろう。
- ・子供の団体入館は、その後、家族としての再訪に繋

がる可能性が大きく、入館料の扱いを工夫してはどうか。

- ・市内の他の博物館、全国の交通関係の博物館との連携を深めることにより、館の特色が一層発揮できそう。

[地元で計画されている北海道鉄道発祥・手稲線の再現に対し、本館への期待は大きく、またこの計画の推進は、館の活動を「まちづくり」につなげるチャンスとなりそう。]

2. 北海道大学ユニバーシティ・ミュージアム

(1)趣旨

- ・北方地域を中心とする400万点余の学術資料を有効に活用する。
- ・学術資料を通して、学内部局間の壁を取り払い、学外とのフェンスを低くする。
- ・アカウンタビリティの一環として、教育・研究成果を博物館を通して公開する。

(2)機能

- ①学術資料のストック・センター
- ②データベース化とネットワーク化
- ③資料と利用者のインターフェイス
- ④先端研究を支える基礎研究
- ⑤学術研究・教育成果の地域還元
- ⑥実践的な体験学習センター
- ⑦キュレーター、自然保護・文化財保護専門家のリフレッシュ
- ⑧アメニティ・スペースの提供

(3)特色

- ・大学全部博物館（学内の全施設のネットワーク化、キャンパスの博物館化）
- ・大学の資源は地域共有の財産（公共財としての自由で責任ある利用）
- ・地域全体のストックハウス（地域ネットワークの拠点、連携協力の窓口）
- ・ユニークな運営（全学の協力、OB教職員の参加、地域のボランティアの活躍）

(4)関連する活動

- ・キャンパスの自然の創成（緑のコリドールづくり）
- ・産学官協力研究センターの設置・発展（地域文化・産業の発展支援）
- ・開かれた大学づくり（大学改革の突破口）

[本年度、ユニバーシティ・ミュージアムのセンターとなる理学部本館の改修に着手。学術資料・標本のデータベース化、ボランティアの活動基準、展示構想等についてワーキンググループで具体的検討を開始。]

3. 北海道開拓記念館

(1)概要

昭和46年、北海道100年記念事業の一環として設置された。北海道の開拓の歴史の中で生まれた文化を体系的に整理するとともに、北方文化と先人の遺産を伝える歴史系総合博物館。

平成4年、最近の社会情勢の変化、調査研究の成果にあわせ展示更新した。生涯学習の拠点、学術・文化交流の場、道内博物館のセンター館として期待されている。

(2)管理・運営の特色

自然公園内の中核となる施設で、知事部局の所管。13万点の資料を保存。展示案内、受付業務を担当する解説員（現在17人）を職員として配置しているのが特色のひとつ。学芸員による研修はあるが、自己研究が中心。開設当時30万人の年間入館者が、最近では10万人程度で推移している。学校や教育委員会との連携が課題。

(3)視察の印象

- ・記念館を取り巻く自然を取り込むことにより、館の活動がより充実するだろう。
- ・解説員による案内が行き届いているが、一面、来館者に考える余裕を与える工夫が必要かもしれない。
(融通性のあるマニュアルづくりが必要)
- ・体験学習室の活動はユニークで面白い。館外での実施を検討してはどうか。
- ・収蔵展示のスペースは特徴的だが、もっと活用する方を検討してほしい。

4. 北海道開拓の村

(1)概要

開拓の過程に於ける生活、文化、産業・経済の歴史を示す建造物を移設・復元して保存するとともに、情景を再現展示して、当時の生活を体験的に理解することを目的とした野外博物館。昭和58年に開村した。

54ヘクタールの広大な敷地は、市街地群、農村群、漁村群、山村群に分かれている。敷地（村）全体が「展示」であり、動態展示として、夏は馬車鉄道、冬は馬車が走る。

(2)管理・運営の特色

施設は道の所有で、管理は財団法人が実施。昭和62年度からボランティア活動を開始し、現在180人が登録している。4月～10月に平均13日（3週に2日）活動。昼食代、交通費、ボランティア保険を財団で負担している。

学芸員のほか、農業専門の職員がおり、情景再現の農作業を行っているのもユニーク。収穫物は村内の施設（古いそば屋、待合所など）で消費している。

年間入場者は約30万人（うち7万人は小中学校の団体）。伝統建造物に関する情報の収集・提供機能の充実を検討している。

(3)視察の印象

- ・全体に「人の気配」があり、生きた町、村が感じられて良い。
- ・自然な形で展示解説、郷土芸能や伝統技術・遊技の演示・指導などボランティアの役割が大きい。
- ・建造物にあわせて、周辺の樹木、草花、構造物等の説明を加えるなど、環境全体の理解ができるようにしてほしい。

北海道の博物館の視察を通して、①実物展示、体験的展示の迫力、②モノとヒトの繋がり的重要性、③博物館を取り巻く自然や街との一体化、④まちづくりに対する博物館の役割について、再認識させられた。

(部会長・沖吉和祐／筑波技術短期大学、
幹事・伊藤美香／三菱みなとみらい技術館)

※次回研究部会は、1月に東京で開催の予定。



制度問題研究部会

第6回研究部会報告

第6回制度問題研究部会は、12名が参加し下記の通り開催された。

日時：平成9年10月18日(土) 13:30~16:30

場所：国立科学博物館

前回に引き続き海外における博物館制度について検討を行った。今回はフランスの博物館制度について研究を行っている井上敏氏（東京大学大学院在学）を招いて話題提供を願った。以下に井上氏による報告要旨を掲載し、第6回制度問題研究部会の報告に替えさせていただきます。

* * *

「フランスの博物館及びその人材養成制度について」

〈要旨〉

井上 敏

フランスの現行博物館制度及びその人材養成は1990年及び1991年に改革が行われている。その改革の主要な政令(décret)は1990年5月16日付政令と1991年9月2日付政令である。1990年政令は国家レベル、1991年政令は地方レベルにおけるコンセルバトゥール(フランス博物館学芸職)についての規定となっている。そして名称においてもそれまで使用されていたconservateurs de musée等の様々な職名に日本では文化財や文化遺産を示す用語-patrimoineを加え、conservateurs du patrimoine(西野嘉章訳：文化財保存監督官)に統一されている(これらの政令の内容はフランス官報 JOURNAL OFFICIEL DE LA REPUBLIQUE FRANCAISEに掲載されたものを使用した)。この改革により、conservateurs du patrimoineは各分野のスペシャリストというよりは文化財に携わる行政官としての性格を持つようになった。

フランスの博物館学芸活動の人材-コンセルバトゥールを考えるにあたって、昨年筆者が見学したフランスの博物館、特にエコミュゼの見学を通して述べてみる。エコミュゼとは「地域社会の人々の生活と、その自然環境、社会環境、の発達過程を史的に探求し、自然遺産および文化遺産を現地において保存し、育成し、展示することを通して当該地域社会の発展に寄与することを目的とする博物館(新井重三訳)」である。これらのエコミュゼにおける学芸活動を指揮するのはコンセルバトゥールである。このコンセルバトゥールは地域社会において、住民の中に入り、その地域におけるさまざまな遺産を引き出し、それを地域住民に喚起するとともに、外からの訪問者にもこの地域らしさを訴えていくことに重要な役割を果たしている。そし

て、単に地域の文化財保護に止まらず、地域における文化事業の立案・予算作成といった行政的な手腕をも発揮している。このコンセルバトゥールの養成に重要な機能を果たすのが国立文化財学院(Ecole Nationale du Patrimoine)である。この機関で養成するのは選抜されたエリートであつて、文化財を扱う専門技術と共に行政手腕を持った人材であるということにその特色を持つ。

一方、日本では大学における学部・大学院レベルの文化財学科が増設されている状況である。しかし、これらの教育内容を見ていくと美術史や考古学、建築史、保存科学等の各学問個別の技術的な観点からのものが多く、法律や予算等の行政的な面からの教育はあまり施されていない。地方分権化と規制緩和の流れの中で博物館学芸員資格を持った者の必置義務を無くす方向も出ている現状の中で、博物館学芸員制度を見直す時期がきている。ここで、このフランス型のコンセルバトゥールの養成が必ずしもベストであると主張するつもりはない。また日本の学芸員資格取得者とフランスの数を絞り込んだエリート選抜のコンセルバトゥールを単純に比較することもできない。しかし、フランスのコンセルバトゥールの制度から、日本の「博物館学芸員」は各個別の学問知識だけでなく、行政手腕と権限を持つということの必要性が読み取れるであろう。

(いのうえさとし/

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程在学)



理論構築研究部会

第2回理論構築研究部会報告

1. テーマ：スミソニアンのエノラ・ゲイ問題と博物館資料の活用

2. 講師：横河電機(株)技術館準備室長 松本栄寿氏
東京大学大学院 山本珠美氏

3. 日時・場所・参加者
平成9年10月11日(土) 13:30~16:30
国立科学博物館大会議室
参加者10余名

4. 開催の趣旨

今日の日本においては生涯学習の重要性が強調され、博物館がその活動分野を広げるためさまざまな手法を採用し、アミューズメント性溢れるレクリエーション活動や伝統的文化遺産の継承活動などのさまざまな方向性をもつ活動を行っている。その典型的なものは、サイエンス・センターの活動であると言われているが、その展示方法や博物館資料の活用方法については議論の分かれているところである。

博物館資料を利用した博物館活動の端的な例は、学芸員の研究成果に基づいて展示しようとしたスミソニアン原爆展に見ることができ、その在り方は必ずしも社会の各層に自明のものとして受け入れられているわけではないことが判明したと言える。

その主たる原因は山本氏や松本氏の指摘するように、近代的博物館が社会に根ざした活動を行うこととなった結果、「コレクションは誰が誰のために行うか」「文化の継承と創造活動と博物館の役割はどうあるべきか」「博物館設立の趣旨と設立の過程はいかにその後の活動を制約するか」「関係団体と博物館活動の関係はどうあるべきか」等の側面から、それぞれの博物館の活動を制約することとなったと言える。

そこで今日の日本の博物館の状況を考え合わせ（主として科学技術史博物館を念頭において）、

- ・博物館資料収集はどう行われるべきか（誰が計画すべきか）
- ・歴史観は誰がどう形成するか（博物館における歴史研究はどうあるべきか）
- ・博物館の展示ストーリーは誰がどう行うべきか（アミューズメントか歴史認識か）
- ・それは、誰がどう判断（評価）すべきであるか（利用者の判断はどう評価すべきか）

の観点からの研究協議を行い、博物館の抱える基本的問題を明らかにしようとした。

5. 研究・協議の内容

(1)NHKの放送「スミソニアン・原爆展」（平成8年12月放映）の一部を視聴

博物館資料を活用する形態として、最も基本的なものが展示である。多くの歴史学者と学芸員の協力によって原爆展が企画されたが、アメリカ国内の戦争観・原爆観の違いによって大きな修正を余儀なくされた過程を振り返ってみた。

(2)松本栄寿氏の論文「スミソニアン国立航空宇宙博物館をめぐる論争—歴史的背景と展示の現状—」（博物館学雑誌21巻2号）とアメリカ各地のスライドを用いて「世界の博物館の動向」とものに対するアメリカのこだわりと博物館活動等を紹介していただいた。

(3)山本珠美氏の論文「博物館のジレンマスミソニアン航空宇宙博物館の原爆展論争に関する一考察—」（東京大学大学院教育学研究科紀要、1996）を参考資料として、現代社会における博物館の意義、特に博物館のフォーラム機能、また、公共博物館の理念に内在するエリートによる文化支配という問題等についても提言された。

(4)質疑・応答・意見・協議内容

・欧米の博物館には、日本の教科書で見られる実物資料が沢山あって驚く。しかしこれは話が逆で、残された資料を元に歴史が形成されているのである。資料の保存は難しいが、基本的に重要なことである。スミソニアン博物館の学芸員は、歴史研究者とともに形成に貢献していると言える。

・歴史は誰が書くか。博物館の学芸員ではなく、歴史学者でもない。結局のところ、一般市民（国民）が決めるものだ。博物館とは、それ以上でもなくそれ以下でもない。

・スミソニアンの「エノラ・ゲイ展」の経過と実状が良く分かった。こんな力のある学芸員のいる博物館がうらやましいと思った。

・ものはそれ自身では博物館資料ではなく、学芸員の調査・研究によって始めて資料となる。それを最も本格的に社会的な展示とした例が、このエノラ・ゲイ展であったと思う。実物資料と文献史料の両方が必要である。

等の意見が出された。

今回の研究会の全体としては、実物資料に基づく情報の公開の重要性と博物館における研究を含めたマネージメントの必要性を確認した。

（部会長：高安礼士/千葉県立現代産業科学館）

<第3回理論構築部会研究会のお知らせ>

平成10年2月上旬開催予定

テーマ等については未定

事業戦略研究部会

研究部会報告／事業評価の調査・研究Part2

博物館といっても、そのあり方は実に多様である。そのため、これらを同一の土俵にのせて評価することは、非常に困難であり、時には、博物館の可能性を阻む危険性すらあるのではないかと、懸念してしまう。試みとして、博物館の評価項目を出してみたときに感じたことだが、一つひとつの評価項目は、裏をかえせば、それらはすなわち「博物館はこうあるべきだ」というあるべき論になっており、ややもすると固定的な博物館像を押しつけてしまう危険性がある。このことは、満たしているか否かを問いかける、単純な評価をする限り、当たり前の構造であるといえよう。

たしかに、博物館法に定められているように、博物館が博物館である限り、最低限満たすべき事柄は存在する。これらを意識して施設づくりに取り組むことは、博物館として当然のことであるといえよう。しかしながら一方で、博物館法等、既成の概念にとらわれない多様なミュージアムが次々と誕生している我が国の現状を考えると、博物館のあり方を一方的に決めつけてしまうような評価体系になってしまつては、「博物館の発展のために」という、当初の我々の主旨に逆行する危険性があると感じてしまう。「なんでもあり」というような無軌道でいいという意味ではなく、博物館とはいったいなんなのか、このあたりのことを今一度考え直したうえで、博物館としての多様な可能性を広く受けとめ、正当に評価していける方法を模索していく必要があるであろう。

さて、事業戦略部会は、こうした観点からジャンルが偏らないように、今年度の例会を開催させて頂く訪問先を選定した。今回は「人文系県立博物館」というテーマ設定のもとに、「神奈川県立博物館」を会場とさせて頂いた。

ゲストコメンテーターとして参加して頂いたのは、当館の宗像盛久氏で、この道ウン十年という大ベテランである。対して問題提起をするメインコメンテーターは、現在、平成11年の開館を目指して「東北歴史資料館（仮称）」の準備に邁進しておられる、宮城県教育委員会の佐藤琴氏にお願いした。大ベテランの宗像学芸員と、若きホープといった感じの佐藤女史の組み合わせは、県立クラスの学芸員層の厚さを感じさせ、なにか心強いものがあった。

両氏より、それぞれに所属する博物館の概要が紹介された。

「東北歴史資料館（仮称）」の大きな特徴は、テーマを「東北地方の歴史・文化」とし、宮城県の枠組みを越え、東北全体を視野にいれているところにあるという。地域の歴史・文化を物語ろうとすると、必ずしも現在の行政区分で捉えることが適切であるとはいえないという問題は、たいいてい県立博物館で直面することであり、宮城県が、「宮城県立博物館」とはしないで、「東北歴史資料館（仮称）」としたのも同様の理由である。しかしながら、実際には、県外資料はレプリカに頼らざるをえなかったり、模型などの造作物はこれまでの研究実績がある県内のものばかりになってしまうなどの現状があると指摘された。

「神奈川県立博物館」は、昭和42年の設立で、当初自然系、人文系を兼ね備えた総合博物館であった。2年前の改装にともない分離し、双方ともに充実を図った。その自然史系博物館が、近年、ジャンボブックや名物館長さんの存在で話題を提供してくれた「生命の星・地球館」であることはご存じの通りである。

今回の論点は、県内に県立だけでなく、テーマ的にも類似しがちな市町村立の博物館があるなかで、「県立博物館」が担うべき役割とはどんなことなのか、県立であるかぎり、県内全域を対象エリアとしていくことが求められるが、どのような事業展開が考えられるのか、といったことであった。

「東北歴史資料館（仮称）」は、県内ばかりでなく、東北全体を視野にいれたスタンスをとろうとしているが、だからといって、東北のセンター博物館としての立場にはどうあつても立ちがたい、という認識があるという。また、長年の経験を持つ宗像氏からは、具体的な交通アクセスの現状を紹介しながら、広域のニーズに平等に応えていくことは、不可能に近いとの指摘があつた。こうした現状があるなかで、県立として担うべき役割として、県内の博物館にたずさわる人々の人材育成や、県内施設の交流を促進するための連絡協議会等を設立、運営していくなどが考えられるとの意見も出た。また、展示は、概論を越えることはなかなか難しいが、それを補う意味でも、充実した読み物として質の高い解説書をつくっていくことも必要ではないか、との声もあつた。

文化施設が県庁所在地に集中する傾向は、どこにでもみられる現象であり、神奈川県横浜市には、県立の歴史博物館、埋蔵文化センター、近代文学館などをはじめとして県立のたくさんの文化施設が設置されている。これらに加え、横浜市の歴史資料館、開港資料館、こども科学館など、市立の施設も数多くあり、まさに文化施設過密地域となつており、遠隔の市町村との格差が生じている。博物館の恩恵にもっともあづかりやすいのは、やはり近隣地域の人々であるとの指摘が今回の例会であつたが、公立博物館でも特に県立博物館は、市町村立の博物館をふくめた県内全域の文化施設設置状況をみわたして、全体のバランスを配慮した事業展開が求められるであろう。こうした視点も、事業評価には必要だ。

（幹事・斎藤恵理／（株）文化環境研究所）



ソフトサービス研究部会

第2回 ソフトサービス研究部会報告

テーマ；マーケティングから見たサービス
～ミュージアムの活性化を中心に～

開催日時；平成9年11月1日 14：00～16：00

場所；国立科学博物館 特別会議室

講師；青山学院大学経営学部教授 坂井幸三郎先生

■開催の概要；諸岡研究部会長を始め15名で実施■

当日は、会場やその他の事情で、ミュージアムショップ研究部会と同日、ほぼ同時時間の開催となったが、研究部会長である諸岡博熊UCCコーヒー博物館長をはじめ、幹事以下の総勢15名もの参加者を得て、青山学院大学経営学部教授 坂井幸三郎先生に、ミュージアムのサービスに関わるマーケティング的観点についてお話をうかがった。

■講義の概要；サービスのマーケティング的観点■

【レジュメより】

マーケティングから見たサービス
～ミュージアムの活性化を中心に～

各種ミュージアムも学校・病院・金融・交通・ホテルなどと並ぶサービス産業の一環として、昨今の「経済のサービス化」の進捗につれ、社会・経済上のウエイトを高めつつある。

しかし、こうしたサービス諸産業も、その供給を支える需要の獲得が不可欠となるが、慢性的な景気の横這い下で大競争時代を迎えて、需要創出と市場開放に積極的にチャレンジしなくてはならない。この役割を担うマーケティングの任務がますます重視され、ミュージアム運営もその例外ではない。

当然この役割を有効に果たせない限り、折角創設されたミュージアムも、本来の社会的使命を果たし得まい。これからの具体的な対策を考えてみたい。

1. 時代・環境とともに変わるマーケティング
2. マーケティング特質とサービス
3. マーケティング戦略・戦術の構築
4. ミュージアム・マーケティングとイベント
5. 結び…現状延長型未来予測より、創造型未来開発へ

坂井教授は、まず現代を「経済のサービス化」の進む時代と位置づける。モノを売る時代は終わりを告げ、エンゲル指数ではなく、エンジェル指数＝「楽しみに対してどれだけ消費するか？」がミュージアムを含むサービス産業で課題とすべきだという。その上で、ミュージアムをサービス業と位置づけた時、次のようなマーケティング的な特質が指摘できるとした。

- 1) ミュージアムのサービスはモノとして見えない→見えるモノとしてアピールする必要がある。
- 2) サービスを展開するハードを伴う→運用のコンセプトが大切となる。
- 3) そこに行かなくてはならない→サービスを享受するため移動する必要がある。現場での感動が求められる。

4) サービスは流通する→前売り入場券、クーポンのような形でサービスも流通にのる。そして、流通には常にリーダーが存在し、動員のためのモチベーションを作り出している。誰が（どこが）リーダーになるか？

これらの整理の背景には、ミュージアムに留まらず、サービス業一般のマーケティング的な特質があることはいうまでもない。ミュージアムにおけるマーケティングについての必要性が認められはじめたとはいえ、その共通の理解に至っていない現在、基本的なマーケティングの特質の整理として参考になろう。

ただし、2)や3)の特質については、例えば、サービスを受ける主体の空間的な移動による享受という点などの面で、インターネットによるサイバー空間でのサービス提供の進展を視野に入れると、すでに何らかの変化がもたらされはじめているとも考えられる。当日は、この点には議論が至らなかったが、坂井教授の演題の冒頭にあるように、「時代・環境とともに変わるマーケティング」という観方に従えば、今後のミュージアムにおける実質的な展開がマーケットそのものを変化させる可能性も秘めているといえる。

■マーケティング戦略の柱■

まとめとして、坂井教授は、マーケティング戦略における2つの柱を提示された。

柱の1；需給の適合～「需」「給」適合はどちらが動くことで成立するか？

需要と供給の間には相当の距離が存在し、生産の時間と消費される時間のズレも拡大傾向にある中で、人々は心の豊かさを求めている。その顧客の主観的な「心の豊かさ」を充足させるためには、顧客志向で対応することが最善とされる。買ってくれるのを「待つ」のではなく、買っていただくために、いかに「動く」かを決定するのがマーケティングの役割である。

柱の2；マーケティングミックス～マーケティングは哲学であり、技術である。

哲学のある最適な技術を、手法として組み合わせ相乗効果を生むためには？

顧客志向のサービスを展開する上での、手法の組合せは無数にある。経験主義で単発の手法のみではなく、無数の手法の組合せを行える“マーケティング・マネージャー”の存在が望まれる。その人材には、豊かな想像力、決断力が求められるとした。

最後に教授は、マーケティング的に観たミュージアムの弱点を宣伝・広告力の低さにあると指摘され、NHKや新聞を利用したパブリック・リレーションの展開の必要性、タレント（ローカルタレント）の起用によるイベントの展開可能性、博物館を舞台に紀行や小説を書く作家の育成に至るまで、いくつかの解決策を提案された。

講義終了後は、諸岡部会長と数名の参加者が、ミュージアムショップ研究部会と合同の交流会（飲み会）で盛り上がり、意見交換の機会を得た。

（幹事・重盛恭一／トータルメディア開発研究所）

教育コミュニケーション研究部会

第2回活動報告

9月6日(土)教育・コミュニケーション研究部会、本年度第2回の部会は、染川香澄さんをお迎えして、「コミュニケーションとしてのハンズ・オンを検証する」といったテーマでお話をお聞きした。改めて、プロフィールをご紹介しますと、染川さんは1993年ボストン子供博物館において、エキジビット・インタープリターを経験され、ニューヨーク・パンクスストリート教育大学大学院で博物館教育コース履修、現在子供を対象とした施設の取材、展覧会プロデュース、ハンズ・オン施設の企画など幅広く活動されている。又、著書には「ハンズ・オンは楽しい一見で、さわって、遊べるこどもの博物館―」共著(土作舎)1996年、「こどものための博物館―世界の実例を見る」岩波書店(岩波ブックレット)1994年、「こども博物館から広がる世界」共著(たかの書房)1993年、等が出版されています。

さて、当日は33名の方が出席され、80点のスライドを中心に、スタッフとして経験された様々な内容について、報告と検証等をお聞かせいただいた。

まず、チルドレンズミュージアムについては、①子供の為に特別に用意された博物館であること(日本の大半の博物館は大人の価値観で設立・運営されている)、②展示とプログラムを通して、子供がそれぞれのペースで様々な欲求を満たすことが出来る―子供の価値観で、楽しく子どもの内的欲求を満たすことも出来る。学ばせる範囲設定しない―学校の教育とは異なる。③以上、2点の内容が優秀な学芸員の個人の能力に影響されることなく、組織的に継続・運営されていること。(学芸員が変わっても、内容は変わらない。)等があげられ、日本との内容の違いもお話いただいた。又、アメリカでのチルドレンズミュージアムとボストンチルドレンズミュージアムの活動や歴史についてもお話された。

1866年 アメリカ全土で義務教育が法制化される。

博物館と学校教育の連携が活性化される。

1899年 ニューヨークブルックリンに世界初のチルドレンズミュージアムが開館(ハンズ・オンスタイルは少なかった)

1913年 ボストンチルドレンズミュージアム開館
(学校に出来ない教育を実施)

1963年 館長マイケル・スボック氏―ハンズ・オンを実施。1年サイクルでテーマを決めた学習の実施―ハドソン川を研究する等、子供の興味を根づかせる教育。例:「ファッツ イン サイド」“中身は何?”(テレビをカット、ゆりの花を半分に、妊婦のおなかの模型、等々)どんどんさわって体で覚える。

1970年代 ボストン・チルドレンミュージアムが現在地に移転。(ウォーターフロント再開発)

館の活動と施設の内容の特長的な一部についてもふれられた。

・ 館の入口、アプローチにクライミングスカラプチュアを設置。親が手出しすることが出来ない、子供だけが登ることの出来るアプローチ〈館の哲学〉―子供それぞれのスペースの尊重。

・ ハウドウ ボーンズ―子供の興味の視点を連続的に展示したり子供の視線で施設全体を構成したり等、現在のチルドレンミュージアムの参考となる様々な活動が実施された。

又、京都町屋の移築(日本文化の学習)、ティーン・トウキョウ(日本の子供の生活)のコーナーもある。

そして、子供の博物館に常設(永久展示)は存在しない。現在はアンダーザドック(館の前にある運河)をテーマとした展示や“静と動”“開放と集中”といった子供の為の興味、沢山の間口を用意することを前提とした内容に取り組んでいる。

最後にハンズ・オンについて。HANDS ON = MINDS ONである。子供が夢中になれる―心がうごく―見たい所で自分のペースで選択ができる。大人や専門家の価値観ではなく、子供の価値観を理解し興味の「きっかけ」を作る場が博物館である。ハンズ・オンはただ手や体を動かすだけのテクニカルな視点ではない。そして子供はたえず変わり続ける、そして我々スタッフも…。

“KIDS KEEP CHANGING. SO DO WE.”

参加者の質問の中から。

Q. 日本の関連施設がハンズ・オンを取り入れる姿勢は。

A. ・一度ではきちっとしたものは作れない。
・メンテナンス予算をたつぷりと取ること。
・来館者の意見を充分取り入れること。
・アメリカは専門外スタッフを必ず参加させる。
・ハンズ・オンの定義は難しいが、実践的に学ぶこともそのひとつである。又、ハンズ・オンと体験学習とは異なる。体験学習はあらかじめプログラムされた内容を、プログラム通りに学習するが、ハンズ・オンは子供達の興味の視点がプログラムである。

Q. 子供自身がたずさわる展示は成功しているのか。

例:ブルックリンチルドレンズミュージアム

「キッズクルー」

A. 来館する子供達と一緒に遊ぶ―子供共有の視点。

他にも参加者から様々な質問がよせられた。

(幹事・弓場哲雄/(株)小林工芸社)

ミュージアムショップ研究部会

「フランスのエスプリ! R.M.N.
その日本法人「R.M.N.ジャポン」の話を聴く」

□R.M.N. (REUNION DES MUSEES NATIONAUX) とは

11月1日(土) 国立科学博物館において、第2回ミュージアム・ショップ研究部会が行われました。参加者は21名。ミュージアム・ショップに興味・関心のある方々がお集まりになりました。

研究会では、「R.M.N. (エール・エム・エヌ) ジャポン」の青木佳代さんと笹島美穂子さんに「R.M.N.」とは何であるか、基本的な役割や活動はどういう内容かなどをお話いただいた後、R.M.N.のミュージアム・グッズやスライド上映を交えて、商品が出来るまでや商品の背景をお話いただきました。

ところで「R.M.N.」とはフランス国立美術館連合(REUNION DES MUSEES NATIONAUX)の頭文字の略称で、フランスの国立の33の美術館を統合している団体です。商業活動を行い美術品購入のための営業を行っています。約100年前はフランスの公共機関は入場無料だったそうですが、その後有料にすることでよりサービスの充実を図るという機関を作ったのがこの半間半民の組織のはじまりです。

活動の特徴として、大きく4つに分けられます。

①美術品の購入

フランスの財産になる美術品を購入する。

②美術展覧会の企画運営

企画・構成された展覧会の展示やそれにあつての契約、運送、保険などの金銭的な面を引き受ける展覧会の企画構成もする。

③利用者へのサービス

利用者に対するサービス業務、受付業務、美術館内のレセプションの開催など

④美術の普及(グッズ・出版を含む)

カタログの出版、ビデオやCD-ROMの作成、ミュージアムグッズの企画制作やそれらの流通まで行う。特に出版においては、フランスのアート関係出版社では大手の一つになっている。

このほかに他の美術館のコンサルタント業務も行うようになりました。

その日本法人が「R.M.N.ジャポン」で、これは2年前に設立されました。「R.M.N.」が世界で初めておいた子会社ということになります。日本での活動はグッズだけでなく展覧会のコーディネーションや、写真貸し出しの手続き代行を行ったりしています。

□ミュージアム・グッズができるまで

「R.M.N.」でのミュージアム・グッズが出来るまでの工程はまず製品部が企画を出すところから始まります。

製品部は展覧会の行われる2年くらい前にどのような

グッズを制作したらよいか企画し、プレゼンテーションをします。制作の許可が出た後、製品化をし、学芸員のチェックが入ります。そして学芸員の許可を得て初めて販売することができるのです。

グッズには教育普及に役立つようにという思いが込められており、彫刻のレプリカには展覧会の解説と同じクオリティの高い解説書がつき、絵画の中にでてくる動物をバッジにしたときには背景をきちんと説明しています。

また、複製物には品質を証明する「R.M.N.」のロゴマークが付いているというところにもグッズには責任を持っていることがうかがえます。

グッズのアクセサリの中では「オブジェ・デ・ロベ」(盗品シリーズ)というのが特徴的です。これは絵画に描かれているアクセサリなどを、まるで絵の中から盗んできたかのように制作し、実用的な複製品にしてしまうのです。ギフトパッケージにはアクセサリとそのアクセサリの元になった絵画が一緒についています。

□日本でのグッズ販売の特色

ローカライゼーション(輸入すると高いものを日本で制作する)を行っています。例えば図柄の版權を「R.M.N.ジャポン」でとり、Tシャツを日本で制作しています。

日本のグッズ業者がR.M.N.の絵を使ってグッズを作りたいというときには企画をフランスに持っていき、許可をとることになります。

□日本での販売内容

現在R.M.N.ジャポンは、ミュージアム・ショップでの販売の他に、展覧会の時にその内容にあったグッズを販売したり、デパートで販売したり、また、通信販売やフジテレビ社屋ショップでも販売しています。

スライドやミュージアム・グッズでの商品説明には海外のデザインの良さや美しさに参加者の方々は大変興味を示していましたし、休憩時間には「R.M.N.」のかたを囲んで熱心に質問をなさっていました。アクセサリはいつでもどこでも女性の興味を引くようです。

美術品を身近に感じることができるよう普及に努めるフランスのミュージアム・グッズが、日本にとっても受け入れられていると感じました。これから日常にミュージアム・グッズが、もっと入り込んでいくことを望みます。

(山田礼子/(株)ミュゼ)

投稿ご自由

かん かん がく がく
侃 々 譎 々

皆さんで考えるコーナーです。ご意見をお寄せ下さい。

バリアフリー・ミュージアム7つの視点(その1)

村井 良子

はじめに

近年、ミュージアムを考える上で、バリアフリー、ノーマライゼーションという観点をもつことが重要となってきた。今後さらに人口高齢化が進むことを考えれば、必須条件とも言えよう。

政府は社会福祉施策として、1994年に高齢者施策のための新ゴールドプラン、1995年には少子化対策のエンゼルプラン、そして障害者プラン（ノーマライゼーション七か年戦略）の3つを策定している。特に障害者プランは、2つの点から画期的なバリアフリー施策として注目している。ひとつは、ノーマライゼーションの理念のもとに、高齢者も障害を持つ人も健常者も分け隔てなく共に暮らせる社会をめざしている点、もう1点は、厚生省だけでなく関係省庁一体となって、障害者の生活全般にわたり横断的、総合的に施策を充実していこうとしている点である。

こうした社会状況のなかで、ミュージアムは社会教育施設、公共サービス機関、情報センターなどの使命を果たすために、どのような方向を模索していったらよいのだろうか。

これまで運営側は、管理し制御しやすいように、空間、時間、組織、財政、情報、手法など様々なものに規制や枠をつくってきた。それらは利用者側にとってはバリア（障害、障壁）となっていたのではなかろうか。そこで、ハード、ソフト両面から、さらに見えるもの以外にも見えないバリアも含めて、バリアフリー・ミュージアムをめざすための視点を広義に捉え、考察してみたい。

1. 建築

「ハートビル法」が1994年に制定され、それ以降建設されたミュージアムの多くは、建築・設備などハード面におけるバリアフリー環境の整備に対して積極的に取り組んでいる傾向が見られる。

しかし、十分に配慮したつもりでも、手すりなどの付け方が違っている／エレベーター内で車いすが回転できない／通常の展示動線をめぐれない／ホールなどの客席が固定式で車いす利用ができないなど、いろいろな問題点も出てきている。

ところでバリアフリー・ミュージアムがめざす方向性のひとつに、誰でも不自由なく利用できる環境づくりがある。高齢者や障害者だけでなく、子どもだけ、あるいは幼児を連れた親子連れの利用も視野に入れたい。具体的には、トイレだけでも配慮すべき点がいくつもある。

オムツ交換ベットやベビーキープを男女のトイレに設置する、幼児ひとりでも安心して使えるトイレを設ける、ファミリートイレを設けるなど。さらに授乳室やプレイスペースなどの設置も挙げられる。

しかし、これらすべてを設置することを提案しているのではない。規定通りの寸法、数量にこだわらず、利用者が使いやすいちよつと広いスペースや小さな配慮が大切であることを強調しておきたい。

また、利用者側に対する配慮だけでなく、後述の6.雇用・住民参加とも関係するが、職員の労働環境も含めて施設全体のバリアフリー環境を整備していくことが今後の課題と言えよう。

2. 展示

展示面においては、建築のような基準や法律がないため、バリアフリー環境の整備は、各ミュージアムの裁量に委ねられているのが現状であり、弱視、難聴、加齢による機能障害などがある人に対してはまだまだ十分な環境とは言い難い。

これまでミュージアムで行われてきた展覧会などのバリアフリー関連事業や設備整備に関しては、いろいろな方の論稿で紹介されているので本稿では略し、今後の指針について論じたい。

バリアフリー商品には障害をもつ人だけを対象にした専用品と、障害者も健常者も共に使えるよう配慮した共用品とがある。誰もが使いやすい、一緒に楽しめるデザインを開発していくための共用品の方法論は、展示の世界にも通じるものがある。

例えば、日本玩具協会では「共遊玩具」づくりを進めており、目の不自由な子も使えるおもちゃには「盲導犬マーク」、耳の不自由な子も使えるものには「うさぎマーク」を設けている。この2つのマークのガイドラインを紹介しよう。

「盲導犬マーク」のガイドライン

(1991年策定後、現在見直し中、現時点の留意点を電話にて確認)

- ・ オンオフスイッチのオンの方に「小さな凸」をつける。
- ・ 電池のフタが分かるように凹凸をつける。電池のプラスマイナスの方向はわかるように触知できるよう立体的に表現する。
- ・ 色の区別ができるよう、凹凸をつける。
- ・ 玩具の場所がわかるよう音が出るようにする。
- ・ 必要に応じて、貼ることができる点字シールを用意する。など

「うさぎマーク」のガイドライン

(1997年7月策定)

- ・ 音に加えて、楽しみや理解を促す光や動き、文字などがある。
- ・ オン、オフが光や動きで明確に確認できる。
- ・ 音の強弱、高低、イヤホン端子などが配慮されている。など

すぐにでもできるアイデアが隠されている。特に直径1ミリ程の「小さな凸」は、シール状に大量生産すれば、すぐにでも展示に応用できる。私たちが何気なく使っている電話機やキーボードのテンキーの5に、この凸がついている。共用品の開発とは、こんなに「さりげない配慮」で可能になるのかと驚かされる。

また「うさぎマーク」に挙げられている音プラス光、動き、文字表示の演出は展示計画の際、意識して配慮していただろうか。

私たちは日頃、最新のハード機器や洗練された環境デザインに目が行きがちだ。しかし展示メディアの共用化を進めていくためには、玩具、遊具、教材、福祉用具、医療機器など様々な分野から学んでいく必要性を感じる。

ところで、これまで展示ではタッチパネルやグラフィカル・ユーザー・インタフェース（GUI）が、誰もが使いやすいと標準化されてきた。しかし、視覚障害者にとってはバリアとなっている。当たり前と思っていた展示デザインの「標準」を考え直すべき時にきている。タッチパネルはテンキーへの置換か併設、GUIは画像にテキストを併記し、文字を音声で読み上げるソフトをインストールすることによって「共用」となる。また、キー入力だけでなく、音声や動きでも入力できるような配慮も必要である。近年、障害者支援ソフトや入出力機器が数多く開発され、安価になってきている。今後、展示計画を考える上ではこうしたハード、ソフトの併用も配慮したいものである。

最後に、機器開発が進み急速に普及しはじめたパーソナルタイプの音声解説システムと、現在開発が進められている携帯用情報端末について記しておきたい。

前者はバリアフリーの観点から見て、1.数種類の解説を提供できる、2.音の強弱や高低を調整できる（難聴者や高齢者に対応）、3.自分のペースで利用できる、4.軽量化し移動が容易であるなど、評価すべき点が多い。特に1.に関しては、健常者（大人）用、子ども用、日本語以外の言語による解説、視覚障害者用の詳細展示解説および誘導案内など、チャンネルを変えることによって自分にあつた解説を選択できる機能に注目したい。

また後者の携帯用端末は、文字と音声による情報提供が可能で、上記の1～4の他に、弱視の人でも利用しやすいように拡大文字で表示する機能を持たせることができる。現時点では、国立民族学博物館の「パーソナル・民博」（開発中）や、東京大学展「知の開放」のPDA（特別展で利用可）などの事例がある。今後、多いに期待したい開発分野である。

紙面が限られているため、問題点や検討案をすべて記することはできないが、とにかく今後バリアフリーの展示環境整備を進めていくためには、様々な観点からの分析・研究が必要であることは明らかである。この場を借りて、検討会の開設を提案したい。

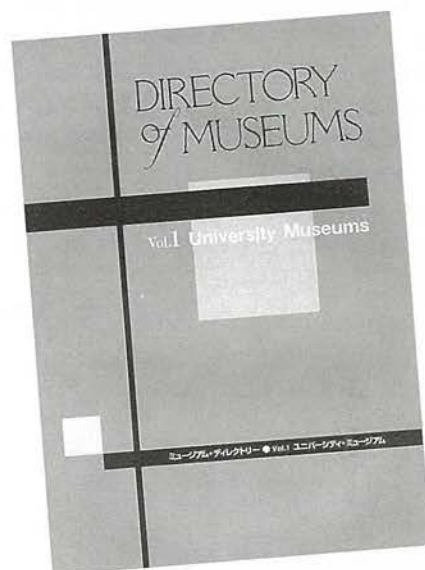
3. 普及事業
4. 情報提供
5. 財政
6. 雇用・住民参加

7. 心——人的サービス

上記の項については、次回投稿にて。

（むらい・よしこ／プランニング・ラボ代表、法政大学兼任講師）

書 評



T. アンブローズ著／水嶋英治訳
『博物館の設計と管理運営』東京堂出版

わかりきったことかも知れないが、マネジメントという意味は広い。ミュージアム・マネジメントというからには「博物館をどのようにマネジメントしていくか」という意味なのであろう。この言葉を分解してみると、すでに開館している博物館の様々な活動、たとえば「教育」「広報」「事業戦略」などが、そのマネジメントの意味であり、当学会の研究部会のテーマとなっている。

ところが、よくよく考えてみると、「博物館を作り出す以前のマネージメント、つまり、新しく博物館を企画したり、設計したり、あるいは製作していく際のマネージメントこそ、原点にかえって体系化しておく必要がある」と思うのは私だけではない。

確たる博物館の理念があり、その理念にそって企画・設計された博物館でなければ、開館後、すばらしい運営ができないのは自明のことである。そして、博物館の理念作り、博物館の企画・設計にあたっては、運営を含めた将来ビジョンを見据えていなければならないのも又、当然のことであろう。

日本博物館協会から翻訳出版された『博物館の基本』は博物館の全体像を理解するのに役立つが、この本と同じ著者ティモシー・アンブローズ氏が書いた『博物

館の設計と管理運営』が最近東京堂から出版された。(原題はManaging New Museum : A Guide to Good Practice)

訳者は科学技術館の水嶋英治氏で、この本の監修には本学会の大堀哲会長があたっている。

新しく博物館を企画・設計する場合、多くは建設会社や設計事務所が主体となり、展示には展示製作者が加わって進められる。しかし、博物館を運営していく管理者も企画・設計の段階から参画していかなければ、「よい博物館」は生まれないのではないか。その意味で、ここに紹介する訳書は博物館の専門家の立場で書かれており、学芸員の水嶋氏が訳している点で、新しい視座を提供してくれているのではなかろうか。しかも、英国の事情も今まで全体的に紹介されていなかったため、本書を通してイギリスの博物館事情をうかがい知ることができる。

たまには、原点にもどって博物館の運営とは何なのか、改めて考え直すことも必要ではないか、と思える一冊である。

(田代英俊／科学技術館)



松本栄寿著『遙かなるスミソニアン』

玉川大学出版部

「スミソニアン」は、私たち博物館人にとっては永遠の憧れである。いつかそこに行き、展示を見、CURATORと話し合い、研究をしたい。そんな夢を実際にやってしまったお話である。50才をすぎて学芸員の資格を玉川大学で取得し、1994年にフェローとしてスミソニアンへわたり、メリーランド大学のフリーデル教授の元で歴史学を学び、博物館建設のための資料収集を行いながら各地のアーカイブスを巡り歩いた1年間の、本にまとめたのである。ワシントン近郊の生活

が手に取るように分かる、貴重な留学の案内書でもある。松本氏による貴重な写真も楽しませてくれる。

いつまでも学び進歩することを望む博物館を愛する人へ、勇気を与えてくれる1冊としてお薦めしたい。

(高安礼士／千葉県立現代産業科学館)



展示学研究所編『ミュージアム・ディレクトリー：vol.1 ユニバーシティ・ミュージアム』
(株)トータルメディア開発研究所 ¥12,000円

最近、日本国内で大学博物館(ユニバーシティ・ミュージアム)を整備していこうという動きが徐々に盛んになってきている。というのも、諸外国に較べてこれまで日本の大学では、大学図書館は設置するものの大学博物館の整備に関して意義を唱えることはそれほど多くなかった。しかしながら、各大学では研究者が収集した学術標本と呼ばれる一次資料を大量に抱えながら、十分に整理・活用・公開がなされている状況とはいえなかった。こうした現状を鑑み、学術審議会を中心として研究活動が高まる中、積極的に資料を活用しようと昨年5月、東京大学ではそれまで総合研究資料館であったものを総合研究博物館に改組し、また京都大学では人文系と理工系を合わせた総合博物館の建設に着手した。

海外においては、ユニバーシティ・ミュージアムを設置することがメジャーといわれながら、国内の文献でそうした実態について詳しく知ることのできるまとまった研究書がなかった。本書は、ユニバーシティ・ミュージアム先進国であるアメリカ・イギリスなど英語圏を中心とした博物館にアンケートを送り、その調査結果をもとに100館分のデータがまとめられている。

歴史・考古・民俗・美術・自然・理工などあらゆる学問からなるさまざまなユニバーシティ・ミュージアムの実態が写真とデータで浮き彫りになり、改めてその多様さに驚かされる。とくに、大学への市民参加という意味では、これまでクロースがちであった大学が、地域や社会に開かれる窓口としてのミュージアムを活用している点が非常に新鮮である。単なる施設紹介にとどまらず、具体的な組織、規模、運営主体、事業内容、コレクション、出版物、インターネット利用状況など運営に関する情報の収集にも力が入れている。その他、巻末には日本国内主要大学博物館リスト（51館）と、海外主要大学博物館リスト（58カ国500館）も掲載されている。

なお、本書は「ミュージアム・ディレクトリー」の第1弾としてまとめられたものであり、第2弾としては現在「vol.2 チルドレンズ・ミュージアム」を調査・編集中である（平成10年2月発行予定）。また、本書の発行と同時に展示学研究所のホームページでは、掲載博物館100館分のリンクサイト（<http://www1.odn.ne.jp/~aaa14820>）が作成されており、ディレクトリーで内容を把握すると同時に、各ミュージアムへはインターネットを通じてアクセスすることにより最新の情報を入手できるという、複合メディアを利用した新しい出版の方法が試みられている。

（木下達文／展示学研究所）

● 会員からのメッセージ ●

〈個人会員・学生会員〉

◆亀田 訓生

[ごあいさつとお願い]

去る5月末に松下電器産業(株)技術館館長を定年にて退職、個人会員として新たに入会させていただいた亀田訓生（かめだみちお）と申します。よろしくお願いいたします。

37年間の会社在职中で、仙台ナショナルショールーム、技術館など6年間ミュージアム関連の仕事に携わりました。その間の経験と勉強したささやかな成果を（今までにミュージアムは200館余見学しています）「企業ミュージアム」というタイトルで240ページの新書版小冊子にまとめつつあります。来る2月に出版できればと考えています。本学会の大堀哲会長、諸岡博熊副会長の立派な数々の関連著書を拝読させていただき、会員の倉本昌弘科学技術広報財団理事長の論文をはじめ、(財)経済広報センターライブラリーや星合重男氏の文献資料を勉強させていただきました。その他の会員の皆様をはじめ、いろいろな方からの各種の情報・資料にもとづき、全国の会社の「企業ミュージアム」約600館にアンケート用紙によるDMを出させていただきました。

各企業の顔、また情報発信・交流の拠点として注目をあつめている「企業ミュージアム」について、理解を広く一般の方にも深めていただく内容にしたいと考えています。あわせてアンケート調査にもとづく、全国の「企業ミュージアム」の魅力を紹介するミニガイド（約520館の予定）の役割も後半部分に収録したいと考えています。

つきましては新しい企業ミュージアム開設情報をはじめ、企業ミュージアムの動き、お気づきの情報がありましたら、ぜひお教えいただけないでしょうか。その様な情報が盛りだくさんにあればあるほど、楽しくてタメになるミュージアムが世の中に数多く生まれてくるものと思っています。

去る10月31日にはユーラシア大陸西端ポルトガルの首都リスボンで、企業ミュージアムの先駆者カロウスト・グルベンキヤンの遺したグルベンキヤン美術館を見学することができましたが、企業ミュージアムについて考えさせられることが数多くありました。

連絡先

〒565-0855 吹田市佐竹台3-8-3

TEL 06-872-0969

FAX 06-872-1101

Email: senri@ss4.inet-osaka.or.jp

◆川上 香（江戸東京たてもの園）

都立小金井公園内にある野外博物館の江戸東京たてもの園は、両国の江戸東京博物館の分館として都内に残る歴史的に貴重な建造物を移築復元し、展示しています。本年10月よりボランティアによる団体ガイドを始めました。短時間でもあわせて見学することができ、わかりやすいなど好評です。ご希望の方は20名様以上で来園希望日より1か月程度前に電話でお申込みください。他に水・木・金曜日には民家の囲炉裏に火を入れています。冬の事業として炉ばたの昔語りも企画しています。（問い合わせ先 TEL 0423-88-3300）



研究部会の開催予定一覧

●現在予定が分かっているものだけを、日程順に掲載しています。
(前号で誤りがあった関係で、終了してしまったものも含まれています。)

研究部会	日 時	テーマ	場 所
理論構築研究部会	10月11日(土) 13:30~16:30	スミソニアンのエノラ・ゲイ問題と博物館資料の活用	国立科学博物館
制度問題研究部会	10月18日(土) 14:00~	フランスの博物館制度について	国立科学博物館
ソフトサービス 研究部会	11月1日(土) 14:00~	マーケティングから見たサービスについて	国立科学博物館
ミュージアムショップ 研究部会	11月1日(土) 13:30~	フランスのエスプリ! R.M.N. (フランス国立美術館連合) その日本法人 「R.M.N.ジャポン」の話を聴く	国立科学博物館
教育・コミュニケーション 研究部会	11月22日(土) 14:00~	大学博物館における新しいコミュニケーションの試み ~開かれたデジタル・ミュージアム	学士会館分館8号室
制度問題/ ソフト・サービス/ 事業戦略3部合同	11月22日(土) 10:00~12:30	ボストン・チルドレンズミュージアム ダイアン・ウィロウ氏に聞く 「ボストン・チルドレンズミュージアムがいつもステキなわけ」	国立科学博物館
ソフトサービス研究部会	12月13日(土) ・14日(日)	研修旅行 (「K O B E ルミナリエ」と UCCコーヒー博物館の接遇を視察する)	UCCコーヒー博物館 ほか
事業戦略研究部会	12月20日(土) 14:00~16:00	民間ミュージアムの意義と役割 —事業評価の調査・研究 part 3—	船の科学館 会議室

- ◆当学会の会員であればどなたでも、すべての部会に参加することができます。参加費等は特に必要ありません。
◆参加を希望される方は、別添の事務連絡票又は電話にて、学会事務局までお申し込み下さい。

INFORMATION

●第3回大会のお知らせ

P. 2でお知らせした通り、第3回大会は平成10年3月7日(土)・8日(日)の2日間、学習院大学を会場として開催されます。プログラムについては決まり次第別途ご連絡いたします。皆様方のご参加を心よりお待ちしております。

●文部省委嘱事業

P. 3に会長報告がありますが、「成熟社会の博物館利用者サービスの新しい在り方に関する研究開発」のために4名の会員から成る調査団が12月6日~16日にわたってイギリス各地を調査します。調査結果については報告書の形でお知らせする予定です。

●研究紀要第2号の発行

10月17日に投稿の申込みを締め切りました。論文と実践

報告をあわせて13件の申込みがありました。原稿提出の期限は12月12日です。第3回大会にあわせて発行される予定ですので、ご期待下さい。

●会費納入のお願い

平成9年度会費の納入をお願いします。個人会員は6,000円、学生会員は3,000円、法人会員は50,000円です。同封の払込用紙をご利用下さい。銀行振込を希望される場合や、請求書・領収書が必要な場合は、事務局までご連絡下さい。

●会員募集

平成9年12月現在で、450件を数える会員登録があります。学会活動の充実のためにも一人でも多くの方々に会員になっていただきたく、いろいろな機会を利用して積極的に当学会をご紹介しますようお願い申し上げます。入会案内書類も新しくなる予定ですので、必要な方は事務局までお問い合わせ下さい。

原稿募集!!

本誌は、会員の皆様がつくる会報です。個性的かつ独創的な原稿をお寄せ下さい。

*侃々諤々: 3,600字程度

書評: 1,000字程度

会員からのメッセージ

個人(学生): 200字程度

法人: 600字程度

JMMA会報 No.7 (vol.2 no.3)

発行日/1997年12月10日

発行/日本ミュージアム・マネジメント学会

事務局 国立科学博物館教育部企画課

〒110 東京都台東区上野公園7-20

TEL 03-5814-9876 FAX 03-5814-9898

デザイン・印刷・製本/(株)ミュゼ